



Title	大阪癌研究会の事業目標について
Author(s)	田口, 鐵男
Citation	癌と人. 1978, 6, p. 2-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/24179">https://hdl.handle.net/11094/24179</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 大阪癌研究会の事業目標について

常任理事 田 口 鐵 男\*

財団法人大阪癌研究会の基本的事業として、癌に関する学術研究の奨励助成と癌制圧、癌知識の普及に努力しなければならない。しかし、残念ながら資金不足のため研究会の活動は消極的になっていることを認めざるをえない。

昭和53年度から集団検診やガン相談事業の有料化によって事業収入をあげ活動をさかんにするべく発足した。すなわち、大阪市淡路町に開設した大阪事務所において①ガン相談、②乳ガンの検診、③直腸癌の検診を開始するとともに、吹田市、箕面市、大東市などへ積極的に出張集団検診をはじめている。

昭和54年度からは検診施設の充実をはかり胃癌、肺癌、子宮癌などの検診をはじめたいと計画中である。それには多額の費用を要するので関係各方面のご援助をたまわりたいと考へている。

ところで、我国では人口の老令化に伴い、いわゆる成人病は年々多くなってきている。死亡順位の上位3位を占める脳卒中、ガン、心臓病は当分その座を譲りそうにもない。人間ドックはそういう時代の趨勢にも応えて、成人病予防のための健康診断検査システムとしてますます重要な意義をもってきている。

かゝる意味から財団法人大阪癌研究会の検診活動も唯単にガンにとゞまらず成人病一般の検査ができるようなシステムの設備を何んとしてもしなければならない。すなわち、特定疾患の精密検査を目的としたものばかりではなく、総合的な健康診断がこれからは要求されると思われる。

人間ドックと集団検診というものはもともと異なった発想から出発したが、いまやお互に接近し、その区別が取り去られようとしている。

人間ドックは個人を対象とし、ある意味では優雅はじめられたが、次第にシステム化され、大衆化され、地域や職域の健康管理の担い手として、今や我国の医療体系の中で大きな比重を占めるようになっている。

集団検診とくにガンの集検においては high risk グループがからず受診するよう指導されなければならない。乳癌、肺癌などそれぞれの癌において次第に high risk グループが明らかにされて来ているので各職域で注意して欲しいものである。

財団法人大阪癌研究会としては集団検診化することによって、検診料の負担を少しでも低額にし能率よくしかも確診率が高くなるように設備技術の精度を高くしなければならない。本会の賛助会員に対しては癌検診の料金の割引を行なってゆきたい。

また、ガン知識の普及のための講演会、印刷物、パンフレットの配布に努めるので、皆様方からのご要望があれば何時でも何処へでも出かけますので、どうか申込んでいただきたいと存じます。

社会状勢はかなりきびしいだけ国民の健康が何より大切であり、ガン征圧を通じて研究会の活動を活潑にしてゆきたいものと念じている。

\* 大阪大学教授（大阪大学微生物病研究所附属病院長）